

Beyond COVID-19 「明日への手紙」

「負けてたまるか」

私は尾道市因島中庄生まれの72歳。今も仕事を続けています。コロナ禍でテレワークが続
き、帰省できず。Online 墓参りするも気持ち晴れず、夢に両親がでました。父は戦後を必
死に生き抜きました。精米製油、食料品、雑貨、新聞、電気製品と商品を変え、子供は入
学前から、お店のお手伝いの毎日。母と共に船で尾道に仕入れに行きました。電気屋を始
め、高1の春は戸塚のH製作所の研究所で修理研修を受け、TVは計56台を修理。そのま
ま家業を継ぐ予定が、大学に運よく合格。ミカン箱に生活用品と本を詰め、母親の姪の所
で、学生生活がスタート。両親の親族、友人等の伝手で、アルバイトを世話して貰い、自
らも探し、世論調査、翻訳、結婚式裏方、ダンプの運転手、お抱え運転手、家庭教師と多
くの経験をしました。「若い時の苦労は買ってでもしなさい」は母の言葉。父は子供の教育
に理解が有り、4人とも大学へ。私は父の影響を受け、新しい世界への好奇心は人一倍強く、
50年前に渡独、IBM研究所で働き、帰国後 関西系S行の後、カメラフィルムの会社に移
籍後、一兆円企業を目指し、経営統合を担当。合併後 フィルム・カメラを事業終了させ、
I工務店に移籍。9年間社長をしました。父の口癖は「負けてたまるか」。原爆の日に広島に
戻った父は翌日から復興作業に従事、黒い雨も経験。81歳で膀胱がんが発症し、幾度も癌
細胞を切除し、13年後、94歳で他界。「負けてたまるか」は口癖。私は仕事と会社を変わ
るごとに多くの失敗をし、苦難に遭遇しました。最大の一つは1978年のカーターショック。
一日で為替が10円動き、一年分の利益を喪失。この時もこの言葉を胸に頑張り、乗り切れ
ました。先般、元アステラス会長の野木森さんから頂いた色紙に「万象必有故」の文字。
在りし日の父の言葉「何事にもその理屈が有り、それが何か自ら考えること」を重ねまし
た。多くの皆さんに育てて頂き、今が有ります。残りの人生はその恩返しと後進にしっか
り襻を渡すことに頑張りたいと思っています。